

## 新教育課程とその指導要領に示された

### 国語教育の方向に対する不満

溝 口 健 也

教育は人間を造るものである。往昔の聖職意識に富んだ教師と異なり、我々は教育の成果について悲観的、懐疑的である、にもかかわらず教育は積極的にも消極的にも教育を受ける者の人間を造っているのである。戦後の青少年の人間像には新教育の影響が良かれ悪しかれ明瞭に刻印されていることは疑えないだろう。新教育は曲り角にさしかかったといわれる。角を曲ってどちらへ行くのか、新教育課程はその方向を示しており、この課程とその指導要領は今後相当の期間にわたって実施され、一つの世代を造っていくであらう。ことに国語の教育は人間の形成に大きく参与するものであり、その課程と指導要領を見て今後の日本の一世代の人間像を推定することも可能である。ではここに示されている新課程から推定される未来像はどうか。悲しいことに私はあまり明かるい予想を立てえないのである。

新課程の基本は一言にしていえば新教育の方向を強化徹底しよう

とするにあらう。新教育の十数年間を通じて現場の教師の大部分は多くの苦勞と失敗の後、国語の新教育の考え方の中に重大な誤りのあることを悟り、実践の場において逐次修正して実行し易い形にしてきた。新教育の線が現在の程度に後退する迄にはそれだけの体験の集積がある。これに一顧も与えず更に強硬な線で引張っていくとする文部省の国語担当者の考えははたしてそれ程の価値のあるものだろうか。

職員室でも、伝達講習会場でもその空気は圧倒的に新方針に反対であるにもかかわらず、公式の場において、また、活字において反対意見に接し難いのも不思議であるが、一つには発表の場が得難く二つには現場の教師達が所詮浮世の身過ぎには御時世に従わねばならぬと諦めているためであらう。世の中には諦めねばならぬことも多いがあまりあっさり諦めてはならぬこともある。当面何の益も

ないとしても言わねばならぬ意見はあらゆる場合に言ったほうが良いであろう。この拙文を機縁として諸賢の御教示を得、私の考えが進歩するようになれば俸せと思う。

では具体的に新方針のどこが不満な点か。根本的に国語教育に対する考え方が誤っていること、したがって古典を軽視し、体系的学習を憎悪することがそれである。体系的学習とは死んだ知識の詰め込みである、体系はいけない、詰め込みはいけない、日常生活と密着しなければいけないという方針で、文法も文学史も体系的には与えない。体系的でない文法、文学史というのは妙な話であるが、もっぱら日常他人と話すとか新聞を読むとかいう行動と直結する様な方向に推進しようという、はなはだ素朴なブラグマティズムに基づいた考え方で一貫している点がある。

人間の修得する知識、技能には二通りある。一は日常的、断片的なもの、日常生活に直接役立つ性質のものであり、他の一は体系的な、だいたい日常生活に直接役に立たない性質のものである。前者は普通の人々を持つ人間が普通の社会的環境に居れば社会的教育によって自然と修得するものであるが、後者は特殊な教育的環境、教育的努力によらなければ修得し難いものである。学校の役割はそこにある。人間の日常生活に不可欠なものは前者である。しかし人間生活を大きく発展させる、あるいは人間を精神的に真の人間とするものは後者である。言葉を技能として扱うこと、日常生活の場における話を重視すること、これも悪くはあるまい。だが学校という特殊な場を借り、文明国中例の無い程少ない国語の時間の相当部分を割いて迄やらなくても当面の用には不自由しないのである。しかるに後者に顧すること、難解な古典に取組むこと、凡人の日常生活

では一生触れえない高度な思索の世界の一端を示している思想的作品にぶつかって苦勞すること、先人の精神的遺産について体系的知識を得ること、これらは大多数の者にとっては学校教育の場を借りなくては其の緒を開くこともでき難いのである。しかも、人間に深味を与え、思想的骨組を与え、広い精神的視野を与え、要するに人間を平板な、日常的な、単なる社会の齒車の存在に止まらせず、一個独立の、神聖な、精神的存在としての、「人間」に造り上げていく力となるのはこういうことなのである。西部の開拓地においてはブラグマティズムの教育は緊急止むをえざる必要であつたらう。文化の伝統ある社会において従うべき考えではなかつたのである。本家のアメリカにおいてもこういう教育は厳しく批判され再検討の時期にはいつているという時代に、いまさら日本でこの方向を推進する必要がなぜあるのか。ブラグマティズムの教育はあるいは新開地において有用であるのみならず、現代社会のメカニズムの中においてより効率の良い歯車を作る上でも有用であるかもしれない。しかし国語教育の理想はそういうものであつてはならない。社会のメカニズムと感覺的刺戟の洪水の中に毅然として立つべき魂としての存在を育てることではなくてはならぬ。抽象に過ぎる言をなすようだが国語教育に関するあらゆる論議は、結局その理想をどう掴むかというところに繫つてくるのである。

次にもう少し詳細に改訂された各局面について述べる。

#### 現代国語の設定と内容

国語甲は元來現代文中心として計画されたのであるがその趣旨が実行されないため、今度は国語甲から古典を追放して現場の教員や教科書編集者の抵抗を封じた訳である。新課程の持つ、古典は日常生

活に縁が薄いから遠ざけるといふ考えの端的な表れである。しかもその内容についてみると、教科書として当然あるべき規範性、安定性がなく、戦後の流行作家の作品を取り上げることが現代性と考えるような浅薄さが見られ、教科書をますます説物的にしている。できれば現代国語の授業時数を少なくし古典を重視したいが、今後の大学入試の傾向を考えるとそれもならず、困ったことである。

### 話す聞くに10分の時間を取る

素朴なブラゲマリズムが最も素朴な形で出てきたものである。すでに今迄いわゆる言語単元は子供談会式の遊びをさせてみたり、娯楽雑誌のプロボクサーのインタビューを教材にしてみたりして現場を悩ませてきた。現場では言わず語らずこの単元をとばして学習するというボイコットをやってきた。それがようやく反映してか、言語単元の傾向も次第に穏和になりかかったところで、いまさら10分の時間を取って話す聞くをやれというのは馬鹿げている。第一にこの要求は原理的に誤りであるし、第二に短かい国語の時間内に他にやるべき課題は多いし、第三に評価も困難であるし、幸い大学入試にも関係はなさそうであるから、しいてやれということならやったことに報告して現場では扱わないという方法を取るのが良いであろう。実際問題として付属あたりでは額面通りやるかもしれないが、大部分の学校ではそんなところに落ち着くであろう。

### 書くことに20以上の時間を取る

現在の生徒はまとまった文を書く能力に乏しいから作文力の養成に力を入れるのは有益である。ただし作文に20以上の時間を取るには次の難点がある。

イ、20分の時間を作文にとればたださえ少ない国語の時間の中

で、古典読解等の基礎力養成にあてる時間はいよいよ少なくなる。基礎力養成を怠った上に立つ作文は其の向上からはずれ、ありあわせの力を適当にやりくりして自己を一方向的に主張するいわゆる「物申す」の態度になりやすい。作文力養成のために基礎学力養成の時間を削るのは本末転倒である。

ロ、一時間生徒に書かせた作文を本気で読んで批評すれば十時間ではすまない。現実にとれだけの教師がその労力を費しうるか。この時間を少なくすれば作文の時間など、はじめから時間潰しに過ぎない。

ハ、学校教育の主眼は、先端的な思想や文体の育成にあるのではなく、穩健で安定した基礎的な力の育成である。しかるに現在は思想的にも文体にもそういう基礎が確として存在し、国語教育界共通の地盤として承認されているとは言いがたい。したがって優れた作文家の養成はしばしば学校の指導方針に対して正反対の発言を賞讃するということにもなるうし、教師が献身的努力をすればする程收拾がつかなくなる恐れがある。

右の難を避け、書く力を養成するために実行可能な良い方法が一つある。現在O×式は下火になり書かせる出題が増加しつつあるが、この傾向をさらに推進することである。これは採点に労力もかかるし、客観性の問題もあるが、経験の結果向かってきた方向であるから、この方向を推進する覚悟さえ定めれば作文を20やるより遙かに無理なく実行できる。生徒も確実に理解したことを確実に表現せねばならぬので、ろくに知らないことについて無反省な熱をあげた文を書きとばす訳にもいかない。「確実に理解し、確実に表現する」という基礎力を養うためには書かせる出題を多くするのが何よ

りである。これとあわせて、しっかりと書物を読ませる方法を講ずるのが良い。現在の生徒は良書に親しむおりが少ない。これが文章が浅薄になりやすい根本原因であってここを正さなければいけない。優れた作品を読むことによって始めて確乎たる思想も表現力も養われるのである。

技術的指導としてもっと力をいれねばならないのは書き取りである。現在の生徒は制限漢字さえ使いこなせない。これが彼等の表現力をはなはだ貧しくしている。この点に平常から注意していけばへたな作文指導より文章力向上に遙かに有益であろう。

#### 文法指導について

戦後の文法中心の古文教育は完全な袋小路に入りこんでしまっており、遅かれ早かれ出直しが要求されねばならないはずであった。今度の課程で文法を読解に必要な範圍に止め、読み馴れていくことによって大意をとっていくという方針を立てているのは正しい。「読書百遍意自ら通ず」というのは読書における常に正しい方法である。但しこの「百遍」がだいたいなのである。読み馴れるということ、換言すれば「多読」ということ、これを抜きにして「古文に親しんでいく」という考え方は無意味である。現在古文の学習時間は少なく読み馴れるという境には遠い。しかも新課程によって更に大幅に古文学習の実時間は減少するのであるから前途は心細い。また、古文の読解をある程度以上に進めるためには文法の知識も不可欠となるのだが、新方針ではおりにふれて文法の指導をすると示している。おりに触れての指導とは言うはやすく、行なうははなはだ難しいが、仮りに相当完全におりに触れての指導をしたところで生徒はひどく詳しいところや、まるで知らないところや、むらだらけの知識を

持つことにならざるをえまい。初めにごく一通りでも体系的に指導しておくことが、その後のおりに触れての指導を効果的にするための基礎作業として必要であろう、かつ、文法指導、特に王朝文法の概観的指導は国語に内在する一種の整然たる秩序について、ごく漠然とした理解をでも与える機縁となるものでもあるし、文法の体系的指導を全廃するという方針には問題がある。現在の品詞論の迷宮にはいつてしまった古文の授業を救出する手段としては、文法の独立時間の廃止にも意味があるが、あるべき形としては文法研究が古典講読の全部にならず、従に止まるよう配慮された上で、一通りの体系的指導がなされるのが望ましい。一切の前提として古典を扱う時間がよほど増加されねばならぬのはいう迄もない。

当面の対策として校内で協議しているのは、大体、大学入試の傾向は今後高校の課程に直結してくるとしても、体系的指導の全廃が古文読解力に予ず影響については樂觀もできないので、一学年時に何かの方法で独立時間を取って文法指導を行ない多少の基礎を作っておく、その後のことは今後の情勢による、といった方向である。

#### 文学史の指導について

文学史というのは多くの作品について一貫した展望を与えるところに意味がある。ごく大ざっぱな展望図を与えておき、その後、個々の作品について、あるジャンル、ある時代について少し詳しい説明をしていくのが効果的である。したがって新指導要領にいう作品毎の指導にはもちろん努力するが、これにあわせて副教科書として文学史の一貫したテキストを与え一区切り宛て読ませて試験していくとか、ある期間にまとめて時間をとってごく概略でも一貫した展望を与えるとかしなければならぬ。

## 漢文の指導について

漢文は国語教材の中で相当大きい意味を持つ。なぜなら長い文化の伝統の中で純和文は、女子供か、男の中でも少し本流をはずれた者の業とされ、士大夫はその志を漢文をもって養い漢文をもって示してきたからである。したがって漢文を軽視する時は精神的遺産のはなはだ大きな部分を軽視する結果となる。新課程が漢文を必修としたのはその意味で結構なことである。もっとも、多くの高校で在来年二単位三ヶ年間の学習をしていたのに比較すると相当の退歩を余儀なくされるし、新指導要領の根本にあるブラグマティズムの精神からして、今後どう変化していくかはなほ不安であるが、現在のところ与えられた漢文の時間を大事にし、できれば増加単位をとるなどして漢文指導に努めるべきである。

新指導要領が書き下し文による漢文学習を重視する方向を示しているのは誤りである。内容と形式とは切り離せない。文章において特にそうである。我々の祖先が漢文から汲み取っていたものを知るために、我々は極力祖先の親しんできた形に直接触れていきたい。しかも漢文の説明は一部の人の言うように多大の労力を要するものではない。現在のはなほだ文字力に乏しい生徒でさえ英語学習の何十分の1かの労力で高校程度の英文とは比較にならぬ高度の内容をもつ漢文に親しんでいる。いくら時間をかけても王朝のなよよした文体になじめない連中も、漢文の簡潔雄勁な文体には案外楽になじみ、力強い言葉のひびきの魅力、莊重にしかもぐんぐん進んでいく言葉の流れの魅力、ただ一語で時には口語の百語よりの確に表現している漢語表現の魅力を相応に感じている。言葉のひびきの美しさ、字面の美しさ、巧みな表現の魅力、文章の流れの魅力、これらを教える

ことはいずれの国の国語教育においてもすこぶる重大な要求であるが、日本の現在の国語教育では、この重大要求に応える要素はなほだ乏しい。わずかに漢文指導において国語教育本来の生命が生き残っている感があつたが書き下し文による指導となると、この要素は大いに減殺されてしまう。単に字面の美が失われるだけではない。訓点によって読んでいく際の若干の抵抗が詠解にそれだけの努力と時間を要求し、その努力と時間とが語句の中に潜む美にも思想の深さにも眼を開かせる機縁となっていた。そういう力も損われていくのである。実地に指導する際に原文中心主義をとることで努めてこの欠点を補う工夫をすべきであると考える。

右は新課程に対する不満と若干の対策である。しかし全体の流れが定まれば末端の個人では抵抗しきれたものではない。現場の教師が一致して指導要領無視に踏み切れるのは大学入試の対策の場合のみである。大学はこれまでのところ、あまり文部省に従順でなく勝手な問題を出してきた。高校教育を壊すといつて非難されていることが、一面、文部省の暴走に教育が引きずられるのを弊害の多い方法ではあるが抑えてきた功もある。新教育課程がこういう風になれば大学入試の持つこの役割に一層期待したいところだが、現役がはいるためには教育課程に沿った出題でなければならぬし、大学の頭自体「新しく」なりつつあるし、文部省の指示が行届いてくる傾向にあるので大学入試の持つブレーキとしての役割は今後期待し難くなるだろう。

文部省の大学入学試験研究協議会の三七年度の入試問題に対する批判をみると、他の教科については知らず、こと、国語に關しては承服できない点が多い。

1、当用漢字音訓表にない漢字によみをつけさせる問題が非難されているが、日本の精神遺産の大部分は当用漢字以前のものである。すでに古典の講読をなす以上、当用漢字以外の字でも読めねばならぬ字は当然存在するはずではないか。

2、文語文で答えることを求めるのは高校卒業者の程度を越えていると非難されているが、多少とも古文を学んでごく簡単な文語文も書けないこと自体がおかしいのである。ある程度の文語文は書けるところ迄高校教育の目標に含まれていいので、始めから程度以上として非難すべきではない。

協議会の立場としては高校の現課程及び新課程の方向に沿って批判するのも当然ではあるが、あるべき国語教育の立場からすれば協議会の批判は妥当でない。しかも現在の状況からみれば批判されたような点は明年度相当に「改善」されるものと予想される。まして伝えられるように適性検査が選抜に大きく働くことにでもなれば国語教育はどうなることか。心細い限りである。

このように一教師としては対抗の途もないような訳だが国語教育のあるべき姿についての理想はいつも持っていたい。ではその理想とはどのようなものか。根本理念については初めの部分に述べたのでも次にもっと具体的な理想を述べる。

#### 国語の時間を大幅に増加する

文明国中で我国の国語時間はごく少ない。ヨーロッパ諸国において日本の英語教育に相当する比重を持っているラテン語教育がすなわち国語の古典教育に相当することを思えば国語時間の少なさは更に著しい。国語教育の人間形成にはたすべき役割から見て現行の時間数は緊急に大幅に増加する必要がある。科学の発達に伴い理工方

面に進む者には早くから理数学科を重視する必要があるが、高校程度迄の国語（と歴史）はその方面に進む者にも必修とせねばならぬ。そのためには他の学課の整理（譬えば英語、芸能等）、一日の授業時数の増加、年間授業日数の増加等を併行せねばならぬ。学校とは要するに猛烈に勉強すべき所であり、一生のうち成長期に猛烈に勉強する期間を持つことはそれだけでも大きな意味があるので、クラブ活動、自治会活動、修学旅行、体育大会、文化祭の類はある程度犠牲にしてよろしい。

#### 古典を重視する

教材としては古典を、それも優れた古典を中心として扱うべきである。古典の中でも二流品を庶民的な作品であるなどといって取り上げる傾向は誤りであり、基準となるべき優れた古典に力を集中して学ばねばならない。また、文芸的、女性的、仮名文学ばかりでなく、形としては漢文体のものも、内容としては宗教的のものも含めて思想的、哲学的、男性的なものをも重視する必要がある。

学習に当たっては多読主善が肝要である。甲では教材を多くし徹底した多読を義務づけて大意を讀んでいき、乙では文法にも注意してより綿密に読んでいく、現在甲の古典学習が乙の文法中心に引き付けられている原因の一つは、客観テストをやらねばならぬからである。乙では客観テストも有益だが、甲では思いついた主観テスト、論文体テストが良い。一長一短はあるが、古典の精神を理解するという本筋に役立つ意味において主観テストの利点はその欠点より大きい。客観テストにかかわっていけば品詞論を文章論に切り換えてみても、古典の味読からは遠ざかった授業になること旧に同じである。

## 規範性のある教材を選ぶ

一流作品を教材とせねばならないのは現代文においても同様である。高校迄の教育は基礎教育であるから、教材は偏ったものでなくある程度評価の定まった名作でなければならぬ。現代作品もこの意味ではある程度古典性のあるものでなければならぬ。この方針によれば自然に、文章としても優れた日本文としての魅力を持つものが出てきて生徒に日本語の可能性を知らせることもできよう。

教育は規範を与える仕事である。現在のごときマスコミの時代には正しい規範を与える仕事は実に重大であり、学校教育以外にその任に当たるものはない。教科書は規範として学習するに足るもので無ければならず、説物ではないけない。教科書を中心としない学習という考えを再検討せねばならぬ。

## 漢文を重視する

漱石は経史を読んで文学は男子畢生の業となすに足ると思い、英文学を学ぶに及んで失望したという。我々が近代文学なり日本の古典なりに接して持つ不満は漱石の失望と多少似てはいまいか。なぜなら近代文学では人間に対する懐疑が、日本の古典では諦観が根底にあり、力強い人間像にも、人間を振り起こす理想主義や使命感に支えられた言説にも乏しいからである。かつての士大夫が小説を婦女子の慰みとし、経史を文学と考えてきたのは意味のあることである。国語教育の人間形成に果たすべき役割を思えば経史の学習にそれほど力を入れてよい。(いわゆる理想主義的文学を教材に取り入れる努力は多少なされてはいるが、まれに真にいい作品であつても長大で散漫という特色を持つ小説の小部分の引用に止まらざるをえないこととも比較考量したい。)その他既述の部と重複する点は省略す

る。

## 言語単元の再検討

単元学習という形自体再検討の要があるが、現行の言語単元中の教材について言えば、差し当たり左のごときものは除きたい。イ、国語を素朴なプラグマティズムの立場のみから見るもの、日本語の美点に愛情を持つ立場でなく、不当に欠点のみを指摘し、時には欠点なりと強弁して日本語に対する劣等意識を持たせるような立場のもの

## 漢字力の重視

国語教育は日本語の特質を生かし表現力を豊かにする方向に進まねばならぬ。現行の国語教育はことさらに表現力を乏しくし、国語の特質を殺すのに力を注いでいる感がある。誰もが使いこなせるはずの教育漢字はあまり多くなくても良いが、文筆の道に進む者はその専門の業であるから、自由に努力して漢字を使い高度な表現をするのが良い。漢字を書きこなすにはある程度の努力がいるが、読みこなすだけならさほどの努力を要しないからである。それだけの努力をなす能力も余裕も無い者には理解できない文があつてもよろしい。義務教育をすませた者には必らずわかる文も必要だが、それは文の性質によることである。(書き取りの必要については書く力の項にも記した。)

その他詳細にわたれば際限もないが、国語教育に対する考え方の根本が改まらない以上どうにもならないことなのでこの辺に止めよう。

教師は誤った指導方針には可能な限り(可能な範囲はごく狭いが)反抗すべしという考えもあるが、元來教師は自己の識見を教

壇から披瀝するために任命されたわけではなく、文部省の方針にしたがって行動すること、指示された範囲の教科書を指示された範囲の方法で扱うことを主な任務として任命されているはずであるのも考えなくてはなるまい。文部省の方針が新課程のようであるとする、今後の国語教師の立場は少からず苦しいと覚悟せねばならぬ。誠に困ったことである。

なお、国語教育は学校教育の一環として存在するのであって、学校教育の在り方が改まらない以上どうにもならぬ面も多い。そういう意味で学校教育全般についての平常の希望の一端を述べる。

#### 一、中学、高校を一本とする

中学で高校入試の準備、高校で大学入試の準備では受験技術の習得に追われ過ぎる。といって適性検査も内申も弊害が大きく、これらを中心とする選抜は望ましくない。むしろ中学高校を一本の六年制とすれば入試を控えてはいても、もう少し一貫した計画で深く学習させられるのではないか。

#### 一、コース制を強化する

コース制を強化すべき理由

イ、人間の才を伸ばすに最も適した時期は短かい。十才を過ぎて音楽を始めたのではけっして一流の音楽家にはなれないという。どの方面にも似たことがある。文明の進歩にとまぬいますます高度な専門能力のある人材を育てねばならず、そのためにはある程度早くから重点教育をせねばならない。人はしっかりした専門の能力を持つてこそ人間になるので、広くて浅い、自由に内満な教養人等というのは馬鹿げた考えである。常識なきを憂えず、学識なきが憂わしいのである。

ロ、人の才には現実には大きな差がある。その才に応じた教育によって誰もがその能力いっぱい伸びるのである。中学三年まで秀才も精薄に近い者も入れ込みの教育をしたのでは低い者はついていけず不良化するし、高い者の能力は殺されてしまう。イギリス、西独等の徹底した英才教育に対して日本の悪平等教育では、次代の日本は人間の質の面で彼等と競争できなくなってしまう。

#### 一、強い教育を行なう

学校教育には二つの意味がある。一つは知育、すなわち知識を与えることであり、他の一つは徳育である。この古風な語の主な内容は、団体生活における規律と、ことに当たったの頑張り精神を養うことかと考えているのだが、現在の低姿勢の教育はこの徳育に効果のないのはもちろん、知育にもはなはだ非能率である。アメリカにおけるソビエト式教育の再認識等という話題も要は鍛錬教育、詰め込み教育の再認識ということである。我々はもう、楽しみながら学習するか、教師と生徒の、あるいは生徒同志の話し合いによる学習しなくてはならない。入試に対する必要上止むをえず一部で厳しい教育をしていると、教育の精神に反するなど非難する「常識」はよくない。教師が真剣に生徒にぶつかる時、なぐる等ということも有りえよう。それでよろしい。教師が真剣にぶつかればまともな生徒には通ずる。この点は昔も今も同じである。勉強する気のない、つまりまともでない生徒は退学させればよろしい。純真で熱心な若い教師が体罰問題で前途を失なうようでは真剣な教育は難しい。一、教師が自己の礎って立つ地盤に対し信念を持ち、共通した指導理念を持つ。

現在の生徒は教師の知識的指導には素直に従う。だがそれ以外の面では、自分達が一寸自治活動でもしようとするやとすぐ抑えにかかると、臆病で、ことなかれの、つまり下らぬ連中であると考える傾きがある。こういう考えの成立しやすいつつの理由は、生徒の考えはマスコミの雰囲気支持されておき、よし浅薄であるにしろ、自由教育主義、社会主義、人民民主主義等どこへでもつないでいけるので、その意味で理念ないし理念的な感じがあるのに対し、教育する側では、思想問題には絶対中立、教科書を勉強しなさい、というだけで何等の指導理念を持たない、あるいは持たないことを建て前としているため、知識以外の点ではまったく指導力、説得力がないところにある。教育基本法や指導要領に示されているようなものは理念とはいいい難いし、現実には生徒を引張って行く力にはなりえない。国語科が理数等と異なり、純知識的指導ではすまされぬ部分が多いこと、特別教育活動においても国語教師は新聞部、文芸部、演劇部等問題を生じやすい面の指導に当たる場合が多いことなどから、こういう厄介な根本問題についてもどうにも眼をつむって通り過ぎ難い気持ちを感じさせられるおりが多いのである。

右のような問題についてあまりに深入りするのはこの論集の趣旨からはずれすぎようから遠慮するが、とにかく何かにつけて国語という教科は教師にとって苦勞の多い教科であり、その苦勞はこの教科が実に重要な使命を持っているからこそであることを痛感するのである。

付記

よく言われる大学入試が高校教育を損なうという意見はあまり重視しなくてよいと思う。競争試験は害もあるが、必要で、結局正当

な方法であるし、こういう強制がなければ人間はなかなか死に物狂いの勉強などするものではない。競争の閥門を大学入試の線に置くのが最善か否かは充分考慮する必要があるが、現在の線にあつても少なくとも適性検査による選抜より良いし、内申中心よりも弊害は少なからう。(現在の内申に信頼性があるのは内申が選抜に影響しないから誰も改竄の時間をかけないだけの話である) 極端にいえば死に物狂いに勉強する一時期を持つだけでも有益なので、これに耐えられない者は振り落してかまわない。競争試験の意義の最低線はここにあるのだが、更に試験の内容を改善していけば受験勉強も、十分に有益な基礎力をつける勉強となりうるのである。教育の理念がもっと正しく保たれ、かつ、能力別専門別コース制と咬合していくならば受験制度による害は少ないだろう。性急に入試制度廃止という方向に考えていくのは誤りである。

(山口県宇部高等学校教諭)